

タチイリ・ヂシンルイ・オヤブン

河上一雄

今、福生市に住む多くの人にとり、タチイリとかヂシンルイ・オヤブンといっても、なんのことか分からないのではなからうか。

地域社会のなかで暮らして行くとき、さまざまな社会関係が生まれて行くが、タチイリ・ヂシンルイも伝統的な社会関係を示す言葉のひとつである。

今や福生において、畑作や養蚕を中心とした生活は見られなくなってしまうが、こうした暮らしのなかで育まれてきた社会関係について紹介し、あらためて今日の社会関係のあり方を見直すよすがとしたい。

一 タチイリ

タチイリにかかわる伝承は、今日希薄になってしまっているが、ひとつ史料をもとに考えてみたい。

内出に残る内出家文書のなかに、明治四三（一九一〇）

年の「仮契約書」がある。

これは、結婚の仲人をするにあたっての契約にかかわる文書であるが、そこにタチイリが記されている。一部を紹介してみると、次のようなものである。

明治四十参年参月廿八日

西多摩郡西多摩村字羽村

契約者 河辺政蔵

同郡熊川村

立入人 島田次郎吉

西多摩郡熊川村

内出猪十郎 殿

この文書は、嫁側の仲人よりの契約書であるが、仲人の隣にタチイリ人の名が記載されている。この文書からすると、内出家のタチイリが島田家となるが、どのような関係であろうか。

タチイリは、一般的にいつてクミアイの補助的役割を果たすものであった。

クミアイは、地域社会にあって今の町会が過去においてムラないシワバとして認識されていた時に、人々の社会関係の基本をなす近隣関係からなる集団であった。

そして、暮らしにおいて、祝儀・不祝儀といった冠婚葬祭や普請の手伝いをする互助機能を持つ近隣関係集団である。

こうしたクミアイだけではやってゆけない時、タチイリが出てくるが、機能的にはクミアイと同じである。もう少し詳しく言えば、結婚式の際にクミアイと同じように手伝うが、必ずとは限らないとか、葬式はタチイリで手伝うなどと伝える。

ただ、どこの家にもタチイリ関係があるかといえば、かならずしもそうではなく、さらにその数も家により異なる。

タチイリが、クミアイに属する家でないことははっきりとしているとともに、同じムラ・シワバ内の家であることも事実であるが、その成立した契機については不明な点が多い。

なかには、もともと同じクミアイであったが、他のクミアイの中へ引越したことをきっかけとしてタチイリとなったと伝える場合もあるが、すべての家とタチイリとはな

っていないためその関係は明白ではない。

このように、タチイリはその関係の成立についてはっきりとした契機はつかめないが、クミアイの範囲を越えた近隣関係とだけはいえよう。

さらにいえば、家に属する成員がなんらかの契機で、ムラ・シワバのつきあいのなかで、そのつきあいを親密にしていったなかで生まれた関係ではなからうか。

そしてこのつきあいが、何回もくりかえされてゆくなかで、家に固定された社会関係へと発展していったと考えられよう。それゆえ、タチイリの意味が分からないのではなからうか。

二 チシンルイ

チシンルイはヂルイともいうが、これもはっきりこのような関係だといえない社会の關係のひとつである。

福生における伝承では、昔の親戚ないし親の親戚を指すとか、本家のことだろうとか、血縁関係はないが昔土地を分けてやった家などと言われる。

そのつきあいかたはさまざまで、クミアイと同様なつきあいとか、祝儀・不祝儀などの冠婚葬祭において親戚なみにつきあいをしているとか、とくにつきあいはないとしている場合も見られる。

チシンルイといった言葉は、広く関東・中部地方にみら

れるもので、福生や多摩地方特有の一定の社会関係を表す言葉ではない。

デシムルイとかデワケ・デミヨウ・デワカレなどと称されるが、その意味する内容は一定ではない。

ただ、福生の伝承にも見られるように、地分け伝承がついでいることが多い。

昔において、土地を分けることがどのような場合に行われたかを考えてみると、親戚とか本家ではないかとする伝承がみえるのはもっともなことであろう。

つまり、耕地や宅地などを分けるといえば、分家の創出にかかわることであるからである。そして、何代も時代がたつてくるなかで、本家とか分家とかいったような関係が薄まる中で、土地があちこちで近接することから、地分けの伝承が強調されたとも考えられる。

それにしても、人々の暮らしが幾重にも重層的な社会関係のもとに営まれてきたことがわからう。

三 オヤブン

オヤブンといえは今日ではいささか聞こえが悪いが、仲人を指す言葉で、多摩地方だけでなくかなり広く分布している。

厳密に言えば、仲人のことはナコウドオヤ・オヤブン・チヌウニン・セワニンなどと称すが、仲人のことを親とか

親分と呼ぶには意味があるといえよう。

福生の伝承では、仲人はどのような人を頼むかはさまざまである。

ことに、社会の大きな変動のなかで、家としてか個人としてかによって、仲人のあり方は変わってくる。

仲人のありかたをまとめてみると、①同じクミアイの家で相互に仲人をしあう、②ムラの有力者に大別される。今では、勤め先の上司などが多くなっているが、それでも親とか家の関係をもとに、伝承されてきたオヤブンの家の人を頼むことも見られる。

先の①のタイプでは、仲人のあり方は双務的であり、家もほぼ同格のものが多く傾向にあり、②のタイプはまさに親分とか親の機能を期待してのことと考えられる。

親分とか親の機能を期待してのことは、何を意味してのことであろうか。

いうまでもなく、社会においてさまざまな保証や援助を期待してのことである。

親が子の面倒を、親分が子分の世話を見ると同じことを期待して、オヤブン・オヤと称しているのである。それゆえ、盆暮のあいさつは、欠かせないといえよう。

(かわかみ・かずお 市史民俗担当編集専門委員 武蔵野市在住)